

狂言の假面

野上 豊一郎

狂言の假面は、能の假面と比較すると、丁度狂言そのものが能と異なるが如くに異なつてゐる。即ち、能は或る理想を表現する舞臺藝術であつて、その假面も寫實を超越した美の表現に適合するやうに作られてあるが、之に反して、狂言はどこまでも寫實を離れないで滑稽、諧謔を弄び、その手段として特に誇張したことを提示したり、辛辣な諷刺を行つたりする舞臺藝術であるから、その假面も、中には表情の誇張されたものや諷刺の對象として曝されるにふさはしく出来たものはないが、概して工作が寫實的であり、しかも何等かの意味で、かしまを表はすやうに出来てゐるのが特長である。

これが狂言面にとつては、必ずしも藝術的の意味からではないが、かなり不利な評價をされるや

うに結果してゐる。といふのは、單なる寫實とかを、かしみとかいふものは、能の立場に於いては、淺薄低級の印象を與へるやうな習慣ができてゐて、狂言面もさういつた目で見られる傾向があるからである。否、假面だけでなく、狂言そのものもさういつた目で見られる傾向がたしかにある。しかし、これは藝術的觀點からすれば全く謂はれなきことで、訂正されなければならぬ。能では、速く廻れば世阿彌以來、幽玄の美といふものがあまりにも過重に評價され、その結果、寫實といふものが淺薄視されたり、をかしみといふものが低級視されたりする傾向が牽として抜くべからざる状態になつてゐるけれども、その見方をそのまま狂言に適用したり、狂言面に適用したりすることは妥當でない。狂言は能とは本質を異にするものであるから、狂言を見るには狂言を見る目で見なければならぬ、と同じく、狂言面に對しても能面とは別の見方で見るべきである。例へば、能面で笑の成分は品位の低下を意味するが、それは狂言面には通用しない筈である。もし狂言面にそれを通用させれば、狂言面は殆んど全部下品なものといふことになるであらう。しかし、それが妥當な見方でないことは、反對に狂言面の標準で能面を律すること（そんなことはめつたに行はれないけれども）が妥當でないと同様である。

狂言面はいつ頃からあつたかの問題は、能面が能の始まつたと共にあつたと理解されてゐるが如くに、狂言面は狂言の始まつたと同時に作られたと推定してよいであらう。また、能面も今日保存

されてゐる優秀な古作の典型が作り出される前に釋拙な作品の使用されてゐた時代があつたと同じく、狂言面も優秀な典型の作り出される前には釋拙な作品が使用されてゐただらうと想像される。それならば、狂言面の優秀な典型を創作したのはどんな人たちであつたかといふと、大體に於いて能面の創作者たちが同時にまた狂言面の創作者たちでもあつたやうである。明和八年に幕府の命を受けて能・狂言の職分の家及び將軍家・諸大名の所藏面の調査をした親世左近元章の調査書『諸家面目録』の記載に據ると、當時狂言の家に於いて謂はゆる「本面」的資格を持つてゐると認められた狂言面の總數は一七二面で、それを所藏者別に擧げると、大藏彌太郎家三〇面、鷺仁右衛門家一〇面、鷺傳右衛門家六一面、大藏八右衛門家五面、大藏彌太夫家三八面、名女川辰三郎家二八面である。その内、切額類と「延命冠者」の類二六面を除くと、即ち、狂言固有面の總數は一四六面となる。その中には作者不明の物が（殊に大藏彌太夫家には）かなりたくさんあるが、作者の明記されたものを摘記すると、赤鶴・越智・禰來・龍右衛門・小牛・千種・日米・春若等があり、その外三光坊・等月・鹿明・ドンマツマ・長命、或ひは河内・近江・古元休・洞白等の名も見られる。これ等の作名は悉く信用してよいかどうかは問題としても、能面の面打たちが狂言面をも打つたといふ言ひ傳へは必ずしもまちがひではないだらう。また、想像することが許されるれば、面打たちが生まじめな氣づまりのする能面の仕事から離れて、愉快な狂言面の製作にかかる時は、いかにもくつろ

いだ肩托のない氣持で、どんなにか楽しみなぶら時間を感じてあろうことも思はれる。實際さう思はれるほどにいきいきした創作意欲の發現が狂言面の優秀な作品には汲み取れるのである。

二

狂言面と能面の今一つの顯著な對照は、その使用法の上に見られる。即ち、能では假面を使用するのが原則であるが、反對に、狂言では假面の使用は一定の範圍内に限られてあり、却つて假面を使用しないのが原則である。尤も、能とても假面を使用するのは主役（シテ）だけの建前であり、ワキは絶対に使用せず、ツレも女性か超自然物に扮する場合でなければ使用せず、子方はもろろんいかなる場合にも使用しないのであるが、シテだけは（四番目物の現在物を除けば）種類の如何に拘らず假面を使用することになつてゐる。然るに、狂言では、脇狂言物・百姓物・大名物・掬物・坊主物・女物・乙物・盗人物・座頭物・冠者物・鬼物・立衆物・仕舞物・雜狂言物の各種類の中でシテに假面を使用させる物といへば、わづかに脇狂言物と鬼物と能の形式に擬へて作つた仕舞物と及び少數の雜狂言物だけであり、その番數は狂言現行曲（大藏流と和泉流を合せて）二百五十三番の中で三十數番に過ぎない。その外にもシテが一時的に假面を使用するものはあるけれども、それは單なる道具としてで、性格表現の扮裝としてではなく、またアド・小アドで假面を使用するもの

も幾らかあるけれども、これは能のツレの場合と同じく、女性とか動物・植物とかの類に限られてゐる。

要するに、狂言の大部分は假面を使用しないのが普通で、その扮装も能のやうに飾り立てたものは少く、たいがいは當時の日常生活の服装で、男ならば縮熨斗目に狂言上下を被て腰帶を締めるとか、或ひは段熨斗目に長上下を被て小刀を挿すとか、或ひは大名とても段熨斗目に素袍上下を被て小刀を挿し、大名烏帽子をかぶるぐらゐの程度で、女にしても縫箔に女帯を締め、頭に美男鬘（美男帽子）と稱して白のきれを結び、前に垂らした兩端を兩手で持つといったやうな程度に過ぎない。（アドや小アドが女の面を掛ける場合は、特に醜女として誇張された「乙おと」とか、特に諷刺の目的に適合するやうに作られた「比丘尼」（「ふくれ」）とか「泣尼」とかを掛ける必要のある時に限られる。）殊に女でも直面ひためんで美男鬘を結びつけるだけであるといふことは、能の女がいかなる場合でも必ず假面なしでは登場しないのに較べて非常な懸隔であり、其處に狂言の直面本位の行き方がはつきりと現れてゐて、單にさういつた外形だけでなく、内面的な心情をも寫實的に表現し易くしてある意圖が明白に讀み取れるのである。

だから、狂言面について論じる時は、狂言の全部についてではなく、狂言の部分的に限られた方面について論じることになるのであり、その點、能面について論じる場合は能の殆んど全部につ

て論じることになるのは非常な相違であるから、このことをまづ理解して置かねばならぬ。

三

狂言面の種類はどれだけあるかといふと、前掲『諸家面目録』記載の名稱は三十七種を數へ得るけれども、その中には同種異名のもの（例へば「比丘尼」（「ふくれ）」と「お寮」「乙」と「三平二満」、「伯藏主」と「似たり」等）があつたり、今日では何に使用してゐたのかわからなくなつたもの（例へば「替女」「又五郎」——「八尾」の罪人の妹は又五郎の妻といふことになつてゐるが、又五郎は何に登場したかわからない）等があつたりするので、それ等をば除外して、最も基本的なものだけを拾ふことにすると、「毘沙門」「大黒」「惠比須」「禰の神」「登鬚」「鼻引」「通圓」「樂阿彌」「平六」「祖父」「比丘尼」（「尼」）「お寮」「ふくれ」「乙」「うそぶき」「けんとく」「武悪」「猿」「伯藏主」「狐」「狸」「鳶」等であり、それに「三番叟」を加へて二十一種となる。その他は派生的類面であつて、基本的典型の面と認めるわけにはいかない。

それ等についてこれから逐次説明して見ようと思ふが、まづ初めに特殊面として「三番叟」のことに觸れて置く。

「一」「三番叟」（黒色尉）

この面は「翁式三番」に限つて用ひられ、様式は切顎で、普通の狂言面とちがふ點は、「翁」「白色尉」または「肉色尉」が普通の能面とちがふが如くである。切顎といふのは、口裂縫を限界として顔面を上下二つの部分に切り放して、上唇は上部の下端に付き、下唇は下部の上端に附いてゐるのを、左右の口角のあたりで飾紐で再びくつ附け合せた様式である。切顎の面の今一つの特徴は眉毛で、「三番叟」では植毛であり、「翁」と「父尉」では俗にボウボウ眉と呼ばれる綿の飾眉で、どちらも普通の能面・狂言面には見られない工作である。目は切顎類の原則に従つて、眼球の部分だけでなく、目の形全體を抉り抜き、皺が目の外眦から前額を迂迴して他の目の外眦へつながり、今一つは下向して鼻翼の方へ左右とも迂迴してゐるのが甚だ圖案的である。面全體の大きさは思ひきつて小さくするのがきまりで、彩色は口唇部の朱を除いては全部黒色で、本文にも「色の黒い尉」とある如く、一名を「黒色尉」といふのもその爲である。

「三番叟」の創作は平安朝時代で、能面・狂言面よりはずつと古く、典型の創始者としては春日日光・彌勒の名が傳はつてゐるけれども、彌勒打の「三番叟」は實物が遺つてゐないからしばらく措き、春日打の「三番叟」（故金剛右京舊藏・男爵三井高公氏藏）と、日光打の「三番叟」（觀世元正氏所藏）、同じく日光打の「三番叟」（故金剛右京舊藏、男爵三井高公氏藏）、以上三面が現存中最も傳統の確實な二つの典型面である。此處に寫真版として紹介するのは狂言大藏流宗家傳來の

赤鶴作と稱する「三番叟」〔岡版一〕である。赤鶴吉成（一透齋）は越前大野の人で、近江猿樂の或る座に加入したともいはれる。製作年代は鎌倉時代（文永年間に主として製作したとも、また弘安年間とも）といはれ、能面作者としては感の激越した表情の面（悪尉）「悪見」「飛出」「黒鬚」「天神」「櫻見」「獅子口」「蛇」等の典型創始者として知られてゐるが、「三番叟」をも打つたかどうかは一應問題になり得る。けれどもそれを否定すべき證據もないから、假に傳來のまゝ取り上げて傳赤鶴として紹介する。これは赤鶴といはれば赤鶴で通らないこともない刀法である。特長は皺と皺の間の餘地に菊の花弁を竝べたやうな鈍目を刻み込んだところが頗る大膽な手法で、且つ甚だ効果的である。此の面は臺徳院（徳川秀忠）から拜領したといつて大藏家では珍重してゐる。「三番叟」の面を江戸時代初期の將軍に與へられたといつても、假面史の上で別に誇るべき理由にはならない（何となれば將軍といへども江戸時代に入つては優秀な面はあまり所藏してゐなかつたのであるから）けれども、その當時の狂言の家の氣持としては將軍拜領といふことは非常な名譽に感じられたものかとも思はれる。しかし、とにかく、「三番叟」の面としては確かに一つの異色ある優品である。

因みに、大藏流では「三番叟」を「三番三」と書く習慣があるが、それは名辭法的に正當の理由を持つことではなく、一流一派の偏執的感情から來た造語に過ぎない。

〔二〕「毘沙門」(毘沙門天)

脇狂言「毘沙門」(清水毘沙門)「毘沙門連歌」のシテ(毘沙門)、及び「夷毘沙門」の小アド

(毘沙門)に用ひられる面で、扮装は、厚板・半切(または括袴)・側次・腰帯に此の面を掛け、透冠を戴き、手に鉾を持つ。毘沙門は帝釋天部下の四天王の一なる多聞天のことで、東方を守護し、また財寶の神として謂はゆる七福神の中に編入され、狂言では殊に禰ありの寶と惡魔降伏災難を打ち拂ふ鉾を授けるので庶民に尊敬される。

さういつた神の面だから、狂言面としては武威を示した中にもどことなく親しみ易さがあり、目の角膜の部分を全部金にして、目蓋がその上に垂れ下つてゐるところなどは能面「惡尉」の或る物を思ひ出させるやうな強さを見せてゐるが、鼻が鼻翼を張り、下顎が前方に突出して、口唇の咬合線をややへの字なりに引き締めてゐるところは「大惡見」を聯想させ、「大惡見」の虚勢に似たもの(一見恐ろしげで、その實は恐ろしくない)をせしめる。それが場合によつては親しみ易さもなり、また場合によつては更により多くの興し易さもなる。「夷毘沙門」では、或る有徳人の一人娘の所へ、鞍馬の毘沙門が西の宮の夷三郎と響入の競争をして、互ひに惡口雜言した上げ句、舅となるべき有徳人に寶をねだられると、また夷三郎と張り合つて身に附けた什寶を惜しげもなく手放すといふ甘さぶりを發揮したりする。

さういつた性格にふさはしく作られた「毘沙門」の面ではあるが、特殊の例として女物「石神」でシテの夫が路傍の石神をのけて自分が石神になつて、圖引に來る女房を待つ時、普通は「うそぶき」などの面を掛けてゐるのであるが、（一）としては此の「毘沙門」の面を掛けることもある。

「毘沙門」の典型面としては、赤鶴作といはれる傑作が大藏流宗家に臺徳院（徳川秀忠）拜領品として傳へられてある。圖版「二」がそれである。同流では此の面に「小不惡」（小武惡）の別名を與へてゐる。工作の上で「武惡」と一脈の相通じるところがあるからであらう。別に茂山忠三郎家に赤鶴在銘の替型「毘沙門」がある。これは恐らく「毘沙門」として作られたものではなく、「應見」と「天神」の間を行つたやうな形式であるが、左右不相稱の工作は狂言面をねらつたものであらう。狂言面とすれば「毘沙門」にでも用ひる外はないので替型として認められなくはない。

「三」「大黒」（大黒天）

脇狂言「夷大黒」と「大黒連歌」のシテ（大黒）と山伏物「禰宜伏」の小アド（大黒）に使用される面である。扮装は唐織（または厚板）・半切・腰帶に法被を被て、此の面を掛け、大黒頭巾をかぶり、脊中に寶の大袋を脊負つてそれを左手で持ち、右手に打出の小槌を持つ。大黒は色が黒くて脊の低いのが特徴で、もとは天部の一員であつたが、わが國では傳教大師が初めて延暦寺に勸請して以來、殊に福天として庶民の信仰を得るやうになつた。分に安んじ足るを知り、以つて自らを

の有を守る、といふ本来の性格が修正されて、信ずる者には惜みなく富貴を與へる神とされ、謂はゆる七福の中でも最も人氣を集めた神である。

その假面は頭部に冠形が附いて、耳が大きく垂れ、目は全形を抉り抜いて、なごやかに笑はせ、口も大きく開いて舌を見せ、植毛の鬚が下顎だけにあるものもあり、ないものもある。彩色は口脣部の朱を除いては他は全部黒く塗り、黒の下地に金粉を散らして底光りのするやうな彩色もある。昔は龍右衛門の作品が鷲傳右衛門家に保存されてあつたといふけれども今傳はらない。寫真に出したのはダンマツマの作といはれるものである。圖版「三」。ダンマツマは檀松間とも團松間とも書く。長命徳右衛門の伯父とのみで本名は知られてないが、一説には長命勘右衛門(彼も狂言面作)のことだともいはれるがよくわからない。時代は室町末期から桃山へかけての間かと推定される。主として狂言面を打ち、二三の能面にもその名を遺してゐる。長命は狂言の家であつた。

「大黒」の面はまた風流にも用ひられた。風流の中に『大黒の風流』といつて、シテ大黒、アド鼠、立衆鼠たち大勢の登場するのがあり、その大黒は鍛頭巾をかぶつて此の面を掛け、春野の鼠どもを従へて出ることになつてゐた。

〔四〕「惠比須」(「夷」(「蛭子」))

これも七福神の一つで、俗に夷三郎と呼ばれるのは、伊弉諾・伊弉册の二神が日神・月神・蛭子・

素盞鳴尊の四子を儲けさせ給うた、その三番目の息子だからである。帽服の缺を以つて權勢を食らず、獨り釣魚を樂しむ、といはれるが、狂言の夷三郎は大いに酒を嗜んで、信心ぶりが氣に入ると福徳を授ける。その扮装は、箔・下袴・黄衣・水衣（または狩衣）に襷をかけ、腰帶を締め、此の面を掛けて、大臣烏帽子を前折に調度掛にし、右手に釣竿を持ち、その釣緒にかかつた大鯛を左手で抱へてゐるのがさまりである。

此の面の用途は脇狂言「夷毘沙門」のシテ（夷）と「夷大黒」のアド（夷）であるが、また「福の神」のシテ（福の神）にも用ひられる。

工作は能面「若男」を笑ひ崩れさせたやうな風に出来て居り、目は思ひきつて折り曲げて外眦をいちじるしく下へ垂らし、唇は蕾を破つた花瓣のやうに開かせ、左右の口角の近くに指頭で壓したやうな壓窩が二つづつ見え、頭部には能面の男面の如く冠形に型どつた墨塗がしてある。「抑もこれは西の宮の夷三郎にておぢやります」と名宣を上げるのにいかにも似つかはしい相貌である。圖版「四」の「惠比須」はかなりの古作で（一説には彌勒作などといふけれどもそれは信じられないが）、もと「大黒」と一對揃つてゐたのを「大黒」の方は或るフランス人の手に渡つて此の面だけが日本に残つたのださうである。

〔五〕「福の神」

「福の神」といへば大黒より「町人衆」にはあるけれども「福神」といへば恵比須・大黒のことであるから、恵比須も福の神であつた。しかし、狂言の起つた時代に單に福の神といふ時は、特に恵比須とか大黒とかに限定しないで、一般的に或る福天を意味することになつてゐたやうであり、七福神の中で強ひて同一化し得るものを求めるとすればむしろ恵比須である。だから脇狂言「福の神」のシテ(福の神)の特定面「福の神」が出来るまでは「恵比須」の面を使つてゐたやうである。

作も「恵比須」には赤鶴作(鶯仁右衛門家・大藏八右衛門家)とか龍右衛門作(名女川辰三郎家)とか稱するものが昔はあつたといはれるけれども、「福の神」には河内(正保二年歿)・大和(寛文十二年歿)以前の作はないことになつてゐる。圖版「五」は大和の佳作で、寫眞を一眼してもわかる如く、全體の印象がひどく近代的になつてゐる。刀法も彩色も織細に手ぎはよく氣が利いてゐて、古作の如くむつくりした素樸な強い味はないが、それだけ美しさは表面に出てゐる。大和の作品について見ると、目だけは全形を細く抉り抜いてあるが、その目の曲がり具合とか唇の開き方とか舌の先を上に向けて下唇の齒列に代用させてあることとか、殊に毛描の巧緻な行き方とかに、また古作には見出せない味もある。何よりの特徴は、眉間の小さい瘤と、目の外眦に飛び離れて現れてゐる小さい笑皺と、口角の傍に極めて淺く見えてゐる唇窩である。

「福の神」では、出雲の大社へ年越に籠りに行つた參詣人たちが、福は内、福は内といつて豆を

撒くと、福の神が賑やかに笑ひながら現れ、富貴になりたければまづ五常の道を守らねばならぬと言ひ聞かせて御酒を供へさせ、ひどく酒を嗜むところもまた夷三郎と共通である。扮装は縫箔・下袴に唐織を壺折に被て、頭には括り頭巾をかぶるが、大臣烏帽子を前折にして調度掛にもする。その點も「惠比須」の場合と似てゐる。近來では「福の神」を「惠比須」の代りに使用する場合が多くなつた。

〔六〕「登鬚」

此の面の名稱は兩頰の鬚が逆さに上向に生えてゐるからで、その他の點では單なる老翁の形相である。しかし、老翁とはいつても、人間の老翁ではなく、下級の神とか物の精とかが假に年とつた人間の姿で現れる場合に用ひられる面であるから、どこかに超自然的特徴を示してもよいわけであるが、鬚が奇怪な登鬚になつてゐる以外にあまりさうした特徴はあらはされていない。

用途は割合に廣いが、狂言よりも却つて能楽に多く用ひられる。狂言では雜狂言「果實争」でシテの茄子の精、アドの橘の精が此の面を掛け、立衆の桃の精・枇杷の精・蜜柑の精・柚子の精・栗の精・山椒の精・瓜の精などの中でも此の面を（「うそぶと」「けんとく」などと交せて）適宜に用ひたりもする。また同じく雜狂言「葺」の立衆の中にも同様に用ひられる。時としては仕舞狂言「祐善」のシテ（祐善の幽霊）などに、本來は「鼻引」の方がふさばしいのであるが、此の面を

用ひることもある。

しかし「登鬚」の代表的用途は、上述の如く、能間の末社の神で、脇能物の「養老」(神舞物)、「白樂天」(眞序舞物)、「難波」(白鬚)、「道明寺」(源大夫)、「大社」(寢覺)、「富士山」(禰祭) (樂物)、「氷室」(加茂)、「嵐山」(竹生島)、「和布刈」(久世戸)、「江島」(玉井)、「金札」(働物)等、四番目物「雨月」、切能物「小鍛冶」(春日龍神)、「第六天」(紅葉狩)、「飛雲」(龍虎)等の中入後に、無地熨斗目・括袴・腰帶・脚絆に水衣を被て、末社頭巾をかぶり、此の面を掛けて、片手に杖をついて出て、立シヤベリをして三段舞を舞ふのがきまりである。(但し、流派によつて、例へば觀世流では「小鍛冶」(春日龍神)のアヒをば段熨斗目・素袍上下・小刀の所の者を出してカタリを言はせるといつたやうな變更も多少はある。)また脇能物「輪藏」(樂物)は末社アヒにしてもよいが、特殊間として「鉢叩」といふ間劇的演技を見せる時は大勢の鉢叩の舞踊に牽かれて瓢の神が此の面を掛けて(箔・下袴・腰帶・唐織壺折の姿で)現れたりもする。

その外、風流で「鶴龜の風流」のシテ(鶴)や「鳳凰の風流」のシテ(后稷)も此の面を掛けることになつてゐた。

「登鬚」の面は早くからあつて、作者としては龍右衛門(大藏彌太郎家)、福來(鷺仁右衛門家、同傳右衛門家)、小牛(大藏八右衛門家)等の名を傳へてゐたが、最後の一つを除く外今は傳はら

ない。大藏流の小半作「登鬚」は去情の類る柔相な愛品であるが、どうしてか「登鼻」といふ名確に變更されてゐる。鼻に何等の異變もないのにをかしな變更である。或ひはどの時代かに「鼻」の字が「鬚」の字の代りに誤記されでもしての變更ではなからうか。しかし、それは「登鬚」としては柔和すぎて典型的とはいへないから、圖版〔六〕には平凡ではあるけれども作不知の普通の型を出して置いた。

〔七〕「鼻引」
はなびき

これも老翁の面であるが、全面に皺を寄せて笑ひ崩れてゐるのと、鼻柱がひしゃげて低くなつてゐるのが特徴である。「鼻引」は恐らく「鼻低」の音字であらう。工作は舞樂面「笑面」を下世話に碎いたやうなところがあり、目は「登鬚」のやうに全形を細く抉り抜き、鼻柱がべしやんこになつてゐるから鼻の先がだんごのやうに圓く飛び出して、恰好はよくないけれども一嬌があり、齒も脱けたり亂杭になつてゐたりして、これも愛嬌があるといへばいへる。「登鬚」が低級の神とか物の精とかに用ひられるのに對して、「鼻引」は人間の中でも洒落氣のある人間の幽靈の面として用ひられる。能ならば男の幽靈の面としては陰惨な「瘦男」を掛けて出るところであるが、それを笑ひ崩れた「鼻引」にするとところに狂言のとかしみ本位の行き方が讀み取れる。即ち能の形式を眞似て一種のパロディとして作られた謂はゆる仕舞狂言「鈴齋」「地曲」「樂阿彌」「双六」などのシテ

はいづれも洒落氣のある幽靈で、皆本來は此の面を掛け、下に無地鬘斗目を着て、小格子を着流にして片袖を脱ぎかけ、角頭巾をかぶつて、持物は祐善には日傘を持たせるとか、通圓には（これは小格子を脱ぎかけにしないで上に十徳を被て）茶碗・柄杓・茶釜・團扇を持たせるとかする。また女物ではあるが『塗師平六』のシテ（平六）も中入後に幽靈の^{（）}似として出る時は（左手に漆瀘^{うるしどし}右手に大篋^{おほびら}を持ち）此の面を昔は掛けたものである。（近代は「通圓」「樂阿彌」「平六」の特殊面が出来たので次第に「鼻引」は用ひられなくなつた。）また近代は「祐善」に「登鬚」を掛けさせる流派もあるけれども昔の如く「鼻引」を用ひる方が妥當である。

近頃は殆んど上演を見ないが和泉流に遺つてゐる脇狂言『筒竹筒』のシテ（鳩の神）は八幡宮の末社ではあるけれども、もともと鳥類のことであるから「登鬚」も似合はしくないと思はれたものか、此の「鼻引」を掛けることになつてゐる。

能間^{あひま}では脇能物『東方朔』『和布刈』のアヒの物の精が此の面を掛けて出る。

風流では『鶴龜の風流』のアド（龜）や『御賀の松の風流』のシテ（松の精）・アド（杉の精）がどちらも此の面を掛けてゐた。

「鼻引」の古作には龍右衛門（大藏彌太郎家）、三光坊（鶯傳右衛門家）があつたといはれるけれども今日傳はらない。圖版〔七〕は古元休の作品である。

〔八〕「通圓」

名稱の如く『通圓』のシテ(通圓の幽霊)の専用面で、昔は上述の如く「鼻引」が用ひられてゐたのを、個性を發揮させようとする創作意欲から作り出されたものに相違ない。三光坊あたりから始まつたことで、近江にも洞白にも作があつたといはれる。

『通圓』は能『頼政』(修羅物)のパロディで、通圓と呼ばれた茶屋坊主が宇治橋の供養に大茶を立てて立て死にしたといふ洒落のめしたもので、詞章も原典『頼政』のそれにもじつて駄洒落たつぶりのものだけに、それに當て込んで作られた「通圓」の面も能面「頼政」に型どつて、「頼政」の悲痛な表情を和らげて苦笑させてあるところがねらひどころである。圖版〔八〕は作者不明の作である。

〔九〕「樂阿彌」

これは『樂阿彌』のシテ(樂阿彌の幽霊)の専用面である。樂阿彌といふのは伊勢別保の尺八吹で、尺八を吹き死にして死んだ執心が浮かばれないで、往來の旅僧に現れるといふ筋は能がかりであるが、但し、直接に能のどの曲のパロディとして作られたものといふではなく、『祐善』や『双六』等と同じく、むしろ『通圓』の類曲と認めるべきであらう。随つてその假面「樂阿彌」も能面のどれを原型として作つたといふでもなく、強ひて求めれば「祖父」の行き方をねらつて、それを

幾らか整頓したものかとも思はれるが、目が殆んど全形を抉り抜いてあるのと、口がややいびつになつて曲つてゐるところには「祖父」の類面としての特徴がうかがはれる。

「樂阿彌」の作者としては河内より古い面打の記載はないから、河内の作品「圖版九」が最初の面とらつてよらだらう。

「一〇」「平六」

『塗師平六』のシテの専用面で、此の曲も後段は能がかりになつてゐるが、初めの部分は純狂言式で、平六の師匠なる都の塗師（アド）が生計が立たなくなり、平六をたよつて越前の一條へ落ちて行くと、平六の女房（小アド）が、平六は今でこそ繁昌はしてゐるけれども師匠に足を留められ、平六の仕事をあがつたりになるだらうと淺はかにも心配し、師匠を都へ歸らせるために平六は去年の秋死んだと言つてしまつたので、師匠をなつかしがる平六を師匠に逢はせることもできず、そこで女房の才覺で平六が幽霊として對面することになる。その時の假面であるから、無地熨斗目に水衣を被て黒頭を振りかぶつて現れる。能ならばさしづめ「瘦男」といふところであるが、狂言だから昔は「鼻引」を掛けてゐたのを、いつの時代からか此の「平六」を作つて掛けることになつたのである。圖版「一〇」は三光坊の作だともいはれるが、果して三光坊の作であるかどうかには多少の疑ひを存して置きたい。工作は能面の行き方で、「瘦男」の類面「二十あまり」に似通つた

ところが、年頃を若めにしたのは弟子の身分でまだ年齒の進んでゐない男だからといふ考へ方に因るものであらう。幽霊の面ではあるけれども「瘦男」とはちがつて目に金を入れないのは、別に怨霊として出現すべき謂はれないからで、その點も「二十あまり」に似てゐる。但し、別に替型として目に金を入れた「平六」（茂山忠三郎氏藏）もある。顴骨が突起して田舎者らしい面白い面である。

「一」 「祖父」

これは一般の老翁の面で、脇狂言「財寶」のシテ（祖父）、山伏狂言「腰祈」のシテ（祖父）、雜狂言「老武者」「枕物狂」「孫掙」のシテ（祖父）等に用ひられる。いづれも腰が曲がり、よぼよぼになつて、顔もいびつにひんまがつてゐる。それを表はすために顔面の工作も左右相稱的でなく、目は一方が垂れ下り、口は片方に引きつり、齒は朽ちかけてまばらになつてゐる、といったやうなひどい崩壊で、皺も大きく全面を取り圍んでゐる。扮装は曲柄によつて多少の相違はあるが、着附小格子に腰帶を締め、角頭巾をかぶつて、杖をつくのが普通である。

此の面は古くからあつて、「スケミ祖父」「ヒタ祖父」「薬水祖父」等のいろいろな型もあるが、いづれも顔の道具が歪んで作られてあり、目が全形を抉り抜いてあるところだけは共通の特徴である。古作としては、赤鶴（大藏彌太郎家、名女川辰三郎家）、小牛（大藏彌太郎家）、龍右衛門（鷲

仁右衛門家、同傳右衛門家)、千種(鷺傳右衛門家)、春若(同)、ドンマツマ(大藏彌太郎家)、長命(名女川辰三郎家)、洞白(鷺傳右衛門家)等の記載は遺つてゐるけれども、實物は殆んど全部發見されな。圖版「一一」は大和吉野の天川社に室町時代から保存されて來た古作で、作者は詳かでないが、古拙な味があつてなかなかの傑作である。

「一二」「比丘匠」「尼」「お寮」「ふくれ」

狂言の女は、前にも述べた如く、普通は清面ひやめで、頭部を白いキンで包んで(美男鬘びんごまつ)、前に垂らした二つの端を兩手で握つてゐるのが原則であるが、例外として「比丘尼」と「乙おと」だけ二種の女面が用ひられる。

「比丘尼」「尼」は、狂言では皆高齢の女で、家庭からも世間からも隱退して、生計も裕かであり、自分だけの寮(庵)に起臥して、お寮さまとかお庵さまとか尊敬されてゐるので、その面も「お寮」の別名を持つてゐる。女の獨身者で、人を使つて世帯くづれもせず、營養もよいからか、皆みな脹はふれ肥ふとつてまるまるした顔たちであるから、その面はまた「ふくれ」とも呼ばれる。同じく高齢者ではあるけれども男の「祖父」とは格段のちがひで、まさに對照的の假面である。

扮装は箔に女帯を結び、此の面を掛けて花の帽子で包むのがきまりである。用途は雜狂言「比丘ひく真ま」「庵いんの梅うめ」などのシテ(老尼)で、また坊主狂言「泣なみ尼に」の小アド(泣尼)にも用ひられるが、

後者は賣主坊主に泣役に僱はれるやうな貧しい尼であるから「ふくれ」の尼の面ではふくはしくない爲か特に「泣尼」と稱する細そりしたあはれげな面ができてゐる。また雜狂言の重い習物（狸の腹鼓）の前ジテ（狸の化けた尼）にも「比丘尼」を用ひ得るが、「釣狐」に「伯藏主」の面がある如く、これには特に「妙春」と呼ばれる面もある。

「比丘尼」の面も古くからあつた筈と思はれるけれども、記録の上では目氷（譬傳右衛門家）、等月（大藏彌太郎家）以前のものはわからない。目氷は越中日氷（氷見）の出家で、淋しい表情の能面を得意とし、室町末期に製作した。等月はそれより一時代後れて、主として狂言面を打つた。河内・近江にも「比丘尼」の作品があつたといはれるけれども、すべて傳はらない。圖版「一二」は近江井關の初期の謂はゆる片假名イセキの作品といはれる。

「一三」「乙」（「乙御前」「姫」）。

名稱は年少の女を意味し、未婚の娘を狂言ではさう呼んでゐる。未婚の少女には可憐さと美しさが期待されるが、狂言では期待の裏切られるところにかしみが生じるやうに構想されてゐるので、「乙」とか「乙御前」とかいへばきまつてあだふくである。正式の名稱ではないけれども洒れて「三平二満」ともいふ。しかし、事實は一平四満ともいふべきほどに、高かるべき鼻だけが平たくて、二つの頬はもとより額も顎もふくれ上つてゐる。ふくれてゐるのが特長だから「ふくれ乙」の異名

もできてゐる。「乙」の中でも特に若いのを「若乙」ともいふ。昔は「姫」の別名があつたのは娘は身分によつて姫とも呼ばれてゐたからである。

用途は乙物（夫婦の關係を取り扱ふ女物に對して結婚以前の男女關係を取り扱ふものを乙物といふ）に多く、『釣針』『二九十八』『吹取』『角水掣』『水練掣』『業平餅』『賽の目』などの小アド（乙）、鬼物『首引』の小アド（鬼の娘）、雜狂言『枕物狂』の小アド（乙）等、すべて小アドの役で、扮装は振袖縫箔に女帯を締め、鬘に元結を結んで此の面を掛け、最後の場面になるまで面相を見せないやうに紅入の箔を被いてゐる。男がその被さを取りのけて面相を見ると恐れをなして逃げ出すといふのが落である。

シテで此の面を掛けるものはないが、すつば物『金津地藏』のシテ（子供）だけは地藏に仕立てられて此の面を掛ける。けれども道具としての使用である。道具としては柔和な佛像の面相に使用される例は『佛師』『六地藏』などにもある。

人間以外のものでも女性的な物の精などには「乙」を使ふことがある。『茸』の中の女茸、『果實争』の立衆の中の女性的な物などがさうである。

同じやうな用法が能の特殊間にもある。例へば『玉井』の『貝づくし』の中の蛤の精とか『輪藏』の『鉢叩』の瓢の神（常は末社の神であるけれども特に紅梅殿の神とする時）とかがさうである。

「乙」の面も古くからあつて、越智の作品（大藏彌太郎家、鶯傳右衛門家）や龍右衛門の作品（鶯傳右衛門家）や近江の作品（同）等があつた。しかし、近代の作品には見るに堪へないやうな醜惡な物が多いのは近代の作家の美意識の貧寒を示すものである。圖版「一三」「一四」は但し前者は傳龍右衛門作、後者は傳棒屋孫十郎作といはれ、その作名の眞偽はともかくとして、いづれも現存「乙」中の優品の部類に屬する。龍右衛門（石川重政）は京都四條の人、室町初期の面打で、面打としては無類の天才であり、棒屋孫十郎は經歷を明かにしないが、桃山時代前後の面打といはれる。

「一四」「うそぞち」(「嘯」「空吹」)

狂言面の中でも最も愉快に出來たものの一つで、此の面の最初の創作者の意圖は甚だ推稱すべきである。ウツブキは口笛を吹くことで、『源中最祕抄』（天慶五年正月七日の條）に「引青馬酒盃十一巡、玉卿有酒氣、吹皮笛、今日李部王記、吹嘯之由有之」とある。口笛を吹く時のやうな口吻と奇怪な目が工作上の第一の特長で、目は眼窩の中に眼球だけが飛び出してゐるが如き形で、その瞳孔が上部に偏向して開いてゐるので、恐ろしく斜視の印象を與へ、口は徳利の或る種の如く突起してつぼまり、その周圍に粗い植毛の鬚が生えてゐる。その口唇の突起に伴つて顴骨から頬筋へかけての殺ぎ落しが必要となり、前額部には思ひ切つて數多くの皺波が疊まれ、全體的に蝸壺のやうな感じを與へてゐる。鼻だけは人間竝の形を具へてゐるが、此の面はどう見ても人間の面相ではな

く、それ自體は笑の表情を作り得ない低級の生物であるが、われわれから見ればをかしみを感ぜず
にゐられないやうな造作の相貌である。

用途は大名物『蚊相撲』の小アド（蚊の精）、仕舞物『蟬』のシテ（蟬の精）、同じく『蛸』のシ
テ（蛸の精）、同じく『野老』のシテ（野老の精）、雜狂言『果實争』の立衆の或るもの（果實の精）
等で、また脇狂言『松脂』のシテ（松脂の精）にもこれを掛けさせる。その他、鬼物『八尾』のア
ド（地獄の罪人）にもこれを掛けさせるが、これは醜男である上に、地獄に落ちて人間らしくなく
なつてゐるから、わざとこれを選んだものであらう。また盗人物『瓜盗人』のアド（百姓）もこれ
を使ふが、それは案山子になるための道具としてであり、女物『石神』のシテ（夫）も道具として
石神に化けるためにこれを使ふ。（また「毘沙門」を使ふこともある。）

間狂言では天狗物のアヒ（天狗の眷屬）は「鷲」の代りに「うそぶき」を掛けてもよく、また『玉
井』の特殊間『貝づくし』のシテ（榮螺の精）などの如き物の精に掛けさせてもよい。

風流では『大黒の風流』のアド（鼠）や立衆（鼠ども）にこれを掛けさせる。

扮装は物によつて一様でないが、多くは無地熨斗目・括袴・腰帶・脚絆に水衣を被て、頭に毛頭
巾或ひは角頭巾などをかぶる。

「うそぶき」の面は古くからあつて、赤鶴の作品（鷲傳石衛門家）や龍右衛門の作品（大藏彌太

郎家・鶯傳右衛門家)や福來の作品(鶯右衛門家・同傳右衛門家)や日氷の作品(鶯傳右衛門家)などがあつたといふ記録は遺つてゐるけれども、實物はいづれも見出せない。圖版「一五」は河内の作品で、現存中では最上の一つである。

「一五」 「けんとく」

これも狂言面の中で最も愉快な物の一つである。名稱の意味はよくわからないが、俗に「賢徳」と書くのは當字である。「見徳」「見得」「験得」等の成句も考へられるけれども、そんな意味でないことも明らかである。或ひは「健徳」とすべきではないかとも思はれるが斷定はできかねる。

「健徳」ならば「健陟」「蹇特」「乾陟」「建佗歌」等の字も當てる。悉達太子が發心して王宮を通れ出た時に乗つた白馬の名(カンタカ)の訛傳で、その白馬は帝釋の化身であり、夜叉鉢足といふ天人が之を助けて深夜に馬蹄を響かして守衛の者の眼を覺ますことを防いだといはれる。此の面が八方睨みのやうな目をして馬の嘶く時のやうな口もとをしてゐる具合は、他の何物よりもまづ馬を聯想させ、しかも一癖ありさうな馬のやうに見えるのが、私には「健徳」を思ひ起させるのである。狂言に馬を登場させる時(『止動方角』『見流鏑』)の小アドは必ず此の面を使ふこともその想定を助ける。

しかし「けんとく」は馬だけではなく、牛(『横座』の小アド)にも犬(『犬山伏』『政頼』の小

アド)にも蟹(『蟹山伏』の小アド)にも用ひられる。尤も、牛と犬は馬と共通ではどうかと思はれたものと見え、近代になつて「牛」(『犬』の面が作られたことが『諸家面目録』に依つて知られるが、「けんとかく」のよさには敵しないので殆んど使用されなかつたらしい。また「馬」と稱するいやに寫實的な長面の作品も近代になつて出来たが、「けんとかく」の如く人格化し得ないところは舞臺面としてむしろ低級なものである。

「けんとかく」は動物の人格化の面として「うそぶき」と好一對をなすものであるだけ、時としては用法が混亂して、前者の代りに後者を、また後者の代りに前者を使用することも許されてゐる。例へば脇狂言『松脂』のシテ、仕舞狂言『蛸』『野老』のシテの如きは、本來どちらを適當としか判明しないけれども、今日では両面共通に用ひられる。また『茸』『果實争』の立衆の中に、適宜に「うそぶき」を使ふと同様に、「けんとかく」も使はれることになつてゐる。

「けんとかく」は能間では「登鬚」にも代用するが、それは「登鬚」では上品すぎる場合に多く、例へば物の精(『和布刈』『玉井』『江島』等のうろくづの精)とか『大蛇』の山の精とかがさうである。おもしろいのは『白鬚』の特殊間『勸進聖』の小アド(鮒の精)にこれを使ふことで、早笛で黒頭を被た鮒の精が現れて、「道者に向ひ怒れる有様まのあたりなる奇特かな」の威風凜爽たる大鮒の相貌は「けんとかく」でないかと表はせないだらう。

「げんとく」も古くからあつた面で、赤鶴（大藏彌太郎家、鷺仁右衛門家）、福來（鷺傳右衛門家・大藏彌太夫家）、龍右衛門（鷺傳右衛門家）、目氷（同）等の作品が昔の記録にはある。圖版〔一六〕は作名を逸してゐるが相當の優品である。

〔一六〕「武惡」

地獄の鬼の面である。鬼の面だから閻魔の面にも使ふ。工作は能面「大德見」を作り變へてをかしみを強調したところが特長である。「大德見」は天狗の面で、實力なくして威風を自負してゐるところに一種の滑稽感を起させるが、その滑稽感は半ば潜在してゐるに對し、「武惡」の方はその滑稽感がひどく表面に浮き出してゐる。鼻は大きな鷲鼻で、顔の中央に彎曲し、その上に大きな目が半ば目蓋の中に隠れて垂れ下り、その下には大きな齒を剥き出して下唇を捲き込んで咬み締め、下顎をひどく前方に突き出して且つ横に廣く張つたあんばいはどうしても苦笑してゐるときき思へない。苦笑するのも尤もで、狂言の鬼たちは初めはえらく威張つてゐるけれども、後ではきまつて亡者たちや人間どもに打ち負かされる。それも相手が爲朝とか朝比奈とかならば止むを得ないが、鷹匠の亡者にあやつられたり、馬口勞の亡者にしてやられたり、博奕打の亡者にごまかされたり、田舎者の後家に子守をさせられたり、留守居の女に隠れ蓑と隠れ笠を奪はれたり、意久地のないことおびただし。さういつた意久地なしの鬼に眞實恐ろしげな（能面「小德見」のやうな）面を掛

けさせては作意に副はないので、その點から「武悪」はうまく考へた面であるといへる。

用途は鬼物「節分」^{せつぶん}「首引」^{くびひき}「八尾」^{やほ}「鬼の糺子」^{おにのまじこ}等のシテ、「朝比奈」^{あさひな}「馬口勢」^{ばくこうせい}「政頼」^{せいらい}「博奕十王」^{ばくあちじゅうおう}等のアド、また「首引」^{くびひき}「馬口勢」^{ばくこうせい}「博奕十王」^{ばくあちじゅうおう}等の小アドなど、いづれも鬼か閻魔か鬼の子分どもである。「神鳴」^{かみなり}のシテは雷神であるけれども藪醫者に針を立てられて悲鳴をあげるほどの意久地なしで、これも「武悪」を掛ける。扮装は鬼頭巾をかぶつたり、赤頭に唐冠を戴いたりして、厚板・括袴・腰帶・脚絆に厚板を壺折にしたり、或ひは法被・半切の姿になつたり、物によつて多少の出入はある。

「武悪」の創作者は赤鶴だとされてゐる。赤鶴の作と稱するものが大藏彌太郎・鷺仁右衛門・同傳右衛門の家にあつた。その他、龍右衛門の作（鷺仁右衛門家・同傳右衛門家）、日氷の作（鷺傳右衛門家）、ダンマツマの作（名女川辰三郎家）、近江の作（鷺傳右衛門家・名女川辰三郎家）等であつた。専門の面打ではないけれども、大藏虎明の作（大藏彌太郎家）と朝倉義景の作（同）もある。その後者を圖版「一七」で示す。これは作として必ずしも傑作とはいへないが、秀吉拜領品として大藏家で珍重しものである。俗に「白不悪」と呼んでゐる。「武悪」の彩色は赤が普通であるが、此の面は洗ひ落したやうな白色になつてゐるのが特異である。

「一七」「猿」

此の面を使うのは大名物『靱猿』、座頭物『猿座頭』の下方ぐらゐで、用途は甚だ稀であるが、能『嵐山』の特殊間『猿掣』となると、シテもアドも小アドも立衆もすべて猿ばかりで、言葉の間にキヤツキヤツといつて頗る賑やかなものである。よい「猿」の面を數多く揃へて持つてゐる座では、「掣猿」(シテ)、「舅猿」(アド)、「姫猿」(小アド)等を區別して使ふ。圖版「一八」は「掣猿」である。子方に使ふ「猿」は小形に出來て、工作も簡單である。

作者としては赤鶴(大藏彌太郎家、同八右衛門家、鷲傳右衛門家)、寶來(鷲傳右衛門家)、等月(大藏彌太郎家)、近江(鷲傳右衛門家、名女川辰三郎家)等が昔はあつたといはれる。

「一八」 「伯藏主」

これは「狐」と共に『釣狐』の専用面である。或る古狐が部類眷屬を獵師の毘で釣り取られ、遂に危険がわが身に及びさうになつたので、獵師の伯父の伯藏主といふ坊主に化けて、大膽にも獵師の家に狐釣を止めると説得に出かける。その時に使ふ面だから、坊主らしくなつてゐなければならぬが、またどこなく狐らしさも残つてゐなければならぬ。人間の顔になりきつてはおもしろくない、といつて、あまり狐に見えすぎてもいかず、どこまでも坊主に化けた狐といふところがねらひどころである。

「伯藏主」の原型は龍右衛門の作で大藏彌太郎家にあつたが、今日傳はらない。圖版「一九」は

井關三代目備中椽の作とされてゐる「伯藏主」で、いづれは古作の寫しであらうが、目に何となく
險しさがあり、殊に左の上眼險縁から不思議な筋が一本曲がりくねつて前額の小皺の中へ消えてゐ
るところ、柱鼻もそれに對應して曲がりくねつてゐるところ、顴骨も左だけにとげとげしさが現れ
てゐるところ、また何よりも口吻部の突起と齒列に狐らしさが感じられるところ、まことに心にく
い創意といふべく、原型の見事さが思ひやられる作品である。

扮装は無地熨斗目鼠色の法衣を被て、角帽子をかぶり、杖をつくのであるが、下には毛皮を着
込んで、裾から正體がちらちら見えるやうになつてゐる。

「一九」 「狐」きつね

これは「伯藏主」の本體の面で、『釣狐』の後シテに用ひられる。すでに伯父坊主に化けて獵師
をまんまと説伏して毘を捨てさせと思つて、いい氣持になつて小歌ぶしを唄つて古塚へ歸る道す
がら、恐るべき毘がまた掛けられてゐるのを發見して、大いに人間の奸智を憤り、同時に好餌に誘
惑されて報復の念に燃え、青みどりの化けの皮を脱いで老狐の正體を現はし毘に飛びかかつて行く
時の面相である。これは狐の顔を寫生すればよいやうなもの、狂言面としてはそれだけではないけ
ない。動物學的正確といふやうなことは大して問題ではなく、やはり人間に化けた狐の本體として
人間の不誠實に憤慨する表情を持たせなければならぬ。

古作には赤鶴（名女川辰三郎家）、福來（大藏彌太郎家、鷲傳右衛門家）、日水（鷲傳右衛門家）等があつたといふが、皆今日傳はらない。圖版「二〇」は井關家初代上總介親信の作といはれる。寫眞で見得る如く、下顎を切り放してくつ附けてあるので開閉が自由にできる。此の後ジテは四足で這つて出て、時時この口を開けては啼き聲を立てるのである。

【一〇】「狸」

これは雜狂言「狸の腹鼓」の後ジテ専用面で、『釣狐』に於ける「狐」の面の如き用途である。筋は夫狸おつとだぬきを獵師に射取られた女狸めだぬきが比丘尼に化けて、夫の行方を捜してゐるうち獵師に出逢ひ、殺生の罪深き謂はれを語つて教化したが、夫の啼聲に恐れて隠れてゐるところをまた獵師に發見され、その場で殺されようとしたが、腹の子が不憫だから助けてくれと訴へ、その代りに腹鼓を打つて見せることになり、引拔で尼の姿から狸の本體に早變りして腹鼓を打つて見せるところが見せ場である。その時に掛けるのが此の面で、前は「比丘尼」の面を掛けて花の帽子で包み、着附無地熨斗目に素絹を被る。また「比丘尼」の代り「妙春めづしゆん」と呼ぶ面をも掛けるが、それとても「比丘尼」の一種である。

「狸」の面には古作は傳はらなう。といふのも、曲その物が比較的近代になつて出來たものだからであらう。

〔二一〕「鷺」

これは天狗の眷屬の面で、烏天狗とか鴟天狗とか木の葉天狗とか溝越天狗とかいはれる末派の天狗に掛けさせる。おもに能の天狗物の間狂言に使はれる。(狂言では『掣入天狗』や『天狗の嫁取』などの上演されてゐた時代には使はれたさうだが、今日では見られない。)

古作としては増阿彌の作品(鷺傳右衛門家)や文藏の作品(名女川辰三郎家)が昔はあつたといはれるが、今はどうなつたかわからない。

狂言面圖版目次

- (一) 「三番叟」〔三番三〕 傳 赤 鶴 作 大藏流宗家傳來面(秀忠拜領) 大藏彌太郎氏藏
- (二) 「毘沙門」 傳 赤 鶴 作 大藏流宗家傳來面(秀忠拜領) 大藏彌太郎氏藏
- (三) 「大黒」 ダンマツマ作 茂山千五郎氏藏
- (四) 「惠比須」 大 和 作 茂山千五郎氏藏
- (五) 「福の神」 大 和 作 茂山千五郎氏藏
- (六) 「登鬚」 古 元 休 作 茂山彌五郎氏藏
- (七) 「鼻引」 古 元 休 作 茂山千五郎氏藏
- (八) 「通圓」 河 内 作 茂山彌五郎氏藝
- (九) 「樂阿彌」 河 内 作 茂山彌五郎氏藏
- (一〇) 「平六」 傳 三 光 坊 作 茂山千五郎氏藏
- (一一) 「祖父」 イセキ作 吉野・天川社藏
- (一二) 「比丘尼」 イセキ作 茂山彌五郎氏藏
- (一三) 「乙」 傳 龍 右 衛 門 作 茂山忠三郎氏藏
- (一四) 「乙」 傳 棒 屋 孫 十 郎 作 茂山千五郎氏藏

(一五) 「うそぶき」

河内作

茂山千五郎氏藏

(一六) 「けんとく」

茂山彌五郎氏藏

(一七) 「武悪」(白不悪)

傳朝倉義景作 大藏流宗家傳來面(秀吉拜領)

大藏彌太郎氏藏

(一八) 「猿」(「犢猿」)

茂山彌五郎氏藏

(一九) 「伯藏主」

井關備中椽作

茂山千五郎氏藏

(二〇) 「狐」

上總介親信作

茂山千五郎氏藏